クローズアップインタビュー

東北人は皆、「ねばり強い」というDNAをもっています。それをご自身の仕事に生かしてください。

東北工業大学 理事長
東北大学名誉教授
日本学士院会員
岩崎（いわさき） 俊一（しゅんいち） 氏

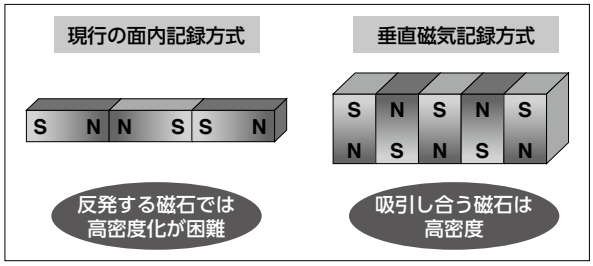
プロフィール

1926年8月3日生まれ。福島県郡山市出身。
1949年東北大学工学部通信工学科を卒業後、東京通信工業（株）（現:ソニー（株））に入社。1951年母校の電気通信研究所助手となり、同助教授、教授を経て86年同所長に就任。1989年東北工業大学学長、2004年から同理事長。1987年文化功労賞、2010年日本国際賞、2013年文化勲章受章。2014年度ベンジャミン・フランクリン・メダル（電子工学部門）受賞。「仕事の困難は、実際の仕事で乗り越えるしかありません。息抜きだけしていたのでは、発想を転換させることはできませんね」と語る。

まじめに続けたことで研究が「天職」に

―平成25年度「文化勲章」受章、誠におめでとうございます。今のお気持ちをお聞かせいただけますか。

長い研究の成果を認めていただき、研究者冥利に尽きます。僕が1977年に発明した垂直磁気記録方式※（以下、垂直記録）とは、磁気ディスクの記録方式の一つで、磁化膜（磁性体）に対して垂直に磁化する記録方式のこと。これによって面記録密度を大幅に高めることが可能になり、ハードディスクの小型化、大容量化、高速化が進みました。この研究がたくさんの人に使われ、今日の情報化社会を支える仕事になっていることを、非常に嬉しく思っています。協力してくれたたくさんの人たちも同じ気持ちでしょう。また、僕は福島の生まれなのですが、東北人のねばりを生かすことができたとも思っています。東北人は皆、「ねばり強い」というDNAを持っているのですから、ものづくりに関わる方はもちろん、震災からの復興、福島の再生にむけて皆さんがんばってくださいと申し上げたいですね。



―先生の発明を活用したハードディスク駆動装置の世界生産台数は、今や年間6億台を超えると言われています。ご自身の研究成果が、世界中で使われていることに対してどのようなご感想をお持ちですか。

この4、5年の間に世の中がガラリと変わりました。垂直記録によって、手のひらに載ってしまうほど小さなディスクに、1テラバイトという膨大な量の情報が記録できるようになったのです。文字にすると五千億字、図書館がまるごと入ってしまうほどの容量をもつハードディスクが出現したことで、皆さんの生活も変わったはずです。そのもととなったのが、僕たちの研究だったのですが、多くの人たちは、なぜそうなったのかを知らないで使っています。文明とはそういうものです。便利になったというだけではなく、生活そのものが変わる。それが文明なのです。

新しい文明をつくったことで、僕はこの仕事を天職なのだと思うようになりました。クラウド、ビッグデータなどという言葉も、垂直記録が出てきたために誕生したもの。今の世の中は、垂直記録が無くなったら何もかもが動かなくなる。そう考えるととても不思議な気持ちがします。

―天職に巡り会い、それを実感できたのは、全身全霊で研究に没頭された結

果でしょうか。

まじめに考えたからだろうと思います。疑いがあっても、途中で投げ出さなかったことが大きいのではないでしょうか。また、天職であることに気づくことができたのは、母校である秋田高校の校歌の2番の歌詞が関係しています。作詞は土井晩翠。この方も仙台の人ですね。

『高きと長きと無言の教　紅顔日に日に顧み思ふ　わが生わが世の天職いかに　秋田の高校一千健児』というもので、「高き」は太平山、長きは雄物川。志を高く、忍耐せよという意味合いでしょう。その後に続く「天職」という言葉が、ずっと胸の奥底にありました。そして、今「天職」という言葉が僕の中にわき上がってきたのです。歌っていたその時は分からなかったことが、ずっと後になって分かるようになる。教育とは大切なものですね。

逆風の中にあっても行動し続ける大切さ

―1990年代には、記録媒体を水平面で磁化する水平記録と競合するという理由から、垂直記録の研究を続けることが困難になった時期があったと伺いました。逆風の中、どのようにして研究を続行したのですか。

「これは真理である」という信念をもっていました。多少時間は掛かるけれども必ずできる。この研究は社会に必要で人に使われるものになると信じていました。それでも「神様ならどう答えるのだろうか」と考えたこともあります。

また研究に携わっていたのは僕だけではありません。200人、300人という研究者たちが従ってきていましたから、僕自身が指揮官となり、研究者や科学者たちを励まし、元気づけるために日本学術振興会の中に磁気記録の委員会を設置。2カ月に1回の割合で会合を開き、国際会議も3年ごとに開催しました。秋田にも研究所をつくり、毎月出かけて行きました。ただ手をこまねいていたのではない。行動したのです。

僕の大学の部屋に掲げている言葉に『実事求是』があります。物理学者で東京大学の総長を務められた茅誠司（かやせいじ）先生の直筆のものですが、「仕事の困難は、実際の仕事で乗り越えなさい」ということだと受け止め、そのようにしてきました。

便利なだけではなく長続きするものを

―先生の研究成果によってできることが急速に広がっています。私たちの生活はどこまで変わるのでしょうか。

僕はそれを非常に気にしているのです。最近の講演では、結論を「大事なのは人間」と結んでいます。世の中をこんなに変えてしまった以上は、必要なのは人間の感覚、感性であるということを言いたい、言わなければならない。その責任があるのだと思っています。

今後の科学技術の目標は新しい文明を築くことにあります。その実現には、科学と技術は将来を見据えた視点と、両者の均衡の取れた発展が不可欠です。同時に高い人間性と、自然に対する十分な謙虚さを基盤に持つ必要があるのです。発明から生まれた製品やシステムを凶器にしてはなりません。文明の利器にしてほしい。それでみんなが生活し、生きていかなければならないのですから、便利なだけではなく、長続きするものをやりなさいと技術者に伝えたいのです。僕が発見したものがいろいろなものに使われ、まさに文明になり、人の生活を変えてしまった。それを体験した僕ならば、言っても良いことがあると最近は思うようになりました。これからも研究を続けながら、講演などを通じて、このことを伝えていきたいと考えています。

11月3日親授式にて天皇陛下から授与された「文化勲章」。

森

『森』は生きています。人間と共に。

二酸化炭素を酸素に。人間にとって欠かせない酸素を、人間が吐き出した二酸化炭素から作り出す植物たち。この自然のサイクルを、一本の木を、そして森全体を、見守っていかなくては……。そう私たちは考えています。私たちは青葉環境保全です。

AOBA 青葉環境保全 ―より良い環境をめざす―

本社／仙台市若林区蒲町19－1　電話(022)286－3161(代)